

「親鸞におきては」

『歎異抄』の著者である唯円房は、「耳の底に留むる」(註釈版聖典831頁) 親鸞聖人のお言葉を記しておられます。

「耳の底に確かに残っている言葉」とは、繰り返し聞かれたお言葉、感動したお言葉、印象的だったお言葉でしょう。

その唯円房にとって、『歎異抄』第2条は、驚くほどに厳しく感じられた、親鸞聖人と東国(関東)の門弟方との緊迫感のある応答です。

住み慣れた東国を離れ、京都に帰られた親鸞聖人のもとを訪ねてきた東国の門弟たち。それを迎える親鸞聖人のお言葉は、「何年ぶりでしょうね。懐かしいですね。お互い歳を重ねましたね」というご挨拶もあったかとは思いますが、『歎異抄』には次のように記されています。

「20日以上はかかるであろう遠い道のりを、ようこそお越しくだ

門弟との緊迫した対話

命がけで歩まれた先輩の姿がしのばれる

さいました。途中でけがや病気になるかもしれない、賊に襲われて金品や、命までも奪われるかもしれない、そんな危険をおかしてまでも命がけで私を訪ねてこられたのは、まさに往生極楽の道を確認したいということですね」

「ここまで、門弟方も、想定していた言葉でしょう。けれども、この続きの言葉は、驚くほどに厳しいお言葉です。」

「私があなた方と共に東国にいた20年の間に、伝えるべきことは全てお伝えしましたよ。私が若い頃に法然聖人からお聞かせいただいたお言葉の全てを、皆さんにお伝えしましたよ」「もし何か新しい言葉や教えが聞きたいのであれば、私のところに来たのは大間違いです。奈良にも比叡山にも、多くの優れた学僧がおられるから、どうぞそちらに向かいなさい。私のところにくても、何も新しいことはありません」と、命がけで訪ねてこられた門弟方を追い返すようなお言葉を語られます。

も、諭されるように、「私にとつては、若い頃にお聞かせいただいたよき人、法然聖人のお言葉が今でもずっと、生きる支えになっています。お念仏とともに阿弥陀さまに救われていく道が全てです」とおっしゃいます。

私は、日頃接している学生たちに、「命がけで学んでいますか?」「命がけで学ぶほど大事なことを学ばせていただく機会に恵まれているんですよ」「20日もかけず、数分で本山に通うことができるのに、お聴聞に通っていますか?」と問いかけることがあります。

「私にとつては」とは、文字通りに受け取れば、親鸞聖人にとつてということでしょう。けれども、「私にとつては」とは、「あなた方にとつても、そうではないのですか?」という問いかけでもあるでしょう。

私も、「本山の法座になかなか足が向かないなあ。学生時代の先輩や後輩、時には教え子が講師のときには、足を運ぶようにしているけど、聴聞の姿勢がそれではダメだねえ。落語などは、同じ演目でも、断家さんによって随分と印象が異なることがあるから、話し手さんが重要な要素となるけれども、法話の場合は、どなたが話されているかは二の次のハズだよなあ。どなたも阿弥陀さまのお話をしてくださっているんだからなあ」と自身を反省することばかりです。

今年2月、私の尊敬する先輩教授が往生されました。すぐれた研究、熱心な指導・教育、門徒のみなさんやご家族を思う優しいまなざしにあふれた先輩でした。20年以上にもわたる闘病生活の中、今から思えば、まさに「身命をかえりみず」に歩まれたご生涯でした。せめて爪のあかでも…とねがいながら、先輩の跡を慕いたく思っています。

「身命をかえりみず」(同832頁)というお言葉があります。命がけでということ。往生浄土の道について尋ねるために、門弟方が命がけでこられたと



カット 林 義明

みんなの法話

たまき こうじ
玉木 興慈

龍谷大学教授
大阪市此花区・浄興寺住職